第十一話　方言平気の卵

沖縄出身の新人君、初めて体験する冬に向かう時期に、Tシャツを何枚も重ね着しているのに同室の先輩が気付いた。翌日、急かすように先輩は、その新人君を商店街のスーパーに連れて行った。そこで初めて見る防寒グッズの数々に、沖縄の彼は、大いなる安堵のため息をついた。こうした発見の場が無ければ、彼は半袖と半ズボンの重ね着だけで一冬を過ごすつもりでいたのだ。それは肘から先と膝から下の無防備を意味し、寒風の時期をぺらぺらのジャンパーと長ズボンでしのごうという無謀な決意に向かわせていた。

柿ノ木寮には全国各地からの入寮生が集まっていた。だから、このような独り合点での悲愴な決意で凝り固まった寮生もよく現れた。北海道出身のある寮生は、夏の暑い盛りでも毛糸で編んだ帽子を手放さなかったが、それは日差しを避けるために帽子は必須の防御策だと思い込んでいたからだ。でも、お節介好きの寮生がメッシュの野球帽があると教えてやったら、あっさり取り替えた。単純に、便利な物を知らなかっただけなのだ。

それは言葉の面にも見られた。各地の方言が方言の自覚の無いままに使われて、聞いた側が別な意味に受け取って、後にその齟齬（そご）が発覚するという形で出来（しゅったい）した。こうした行き違いの妙は、吾輩ら鹿にすると実感しにくい。なぜかというと、吾輩らは、言語に頼らないコミュニケーションを得意としているからだ。でも、似たようなことはある。鹿同士の身振りにも多少の方言的差違はあるからだ。まぁ柿ノ木寮生ほどの差違では無いのであるが。

ある部屋で、一人の先輩がやっと書き上げたレポートのページが一枚分足りないと、大騒ぎになっていた。同室の1回生が、ゴミ箱の中身はどこにいった、と先輩から聞かれた。ああ、さっき山田君が投げてきたところです、とその新人君が答えたのだが、この「投げた」が問題になった。先輩としては、ゴミ箱の中に自分の探し物が紛れ込んだかもしれないと焦っていたのだが、「ゴミを投げる」という表現に引っかかってしまった。だってゴミは投げるものじゃなく捨てるものだろう。先輩は、「ちゃんと、ほかさなあかんやろ」と声を荒げて言った。

ここでの問題は、北海道方言で「ゴミ投げ」が「ゴミ捨て」を意味しているが、それが関西弁では「ほかす」になるという点にあった。先輩から「ほかす」と言われても、北海道の新人君はすぐには理解出来なかった。自分が非難されていると感じられたので、謝ることにした。「はい気を付けます。これからは、ゴミはとかすようにします」と、緊張して答えた。「ほか